

個でありながら仏性 ～絶え間ない自己形成～・・・	1
近代日本の“いのち”と“死”	2
真宗の教えを聞いたものが活動する理由	3
仏弟子たちの仏教	4

同朋大学 “いのちの教育” センター
 〒453-8540 名古屋市中村区稲葉地町7-1
 TEL 052-411-1373
 Eメール宛先 inochi@doho.ac.jp

● 同朋大学 “いのちの教育” センターだより

2019年度も「いのちの教育」をテーマに連続講座（全5回）を開催いたしました。第3回は学外より特別講師として田中智教氏（名古屋別院社会事業部）をお招きし、貴重なお話をうかがいました（要旨を今号所収）。第4回は疇地希美本学社会福祉学部専任講師により「絵本の音楽会—赤ちゃん社長とモチモチの木—」と題する素敵なコンサートを開催していただきました。第4回以外の内容要旨を今号で紹介いたします。ご味読ください。

2020.3.31 No.51

個でありながら仏性

～絶え間ない自己形成～

岩瀬 真寿美

はじめに、現代日本におけるいのちの教育について、特に初等中等教育段階の学校における道徳教育等で実施されている内容を概観した。そして、仏教が伝統と経験を生かして死者論を新たに構築するべきという指摘があることから、今回は、曹洞宗の開祖である道元の仏性論によるいのちの教育への示唆について考えることとした。

「あなたはそのまま良いのだ」と自己受容、自己承認をさせるのではなく、絶え間ない自己形成、人格的成長を促す必要性を説く哲学、さらに、個でありながら仏性であるという哲学を、道元の思想を貫く仏性論、すなわち「悉有は仏性なり、悉有の一悉を衆生といふ」（『正法眼蔵』）において読み解くことができる。

道元は、目標に辿りつくことそれ自体を目的とせず、ひたすら努力し続けるところに仏のいのちを見る。ここから導き出されるいのちの教育の土台とは、

今この一瞬を努力し続けている人間の生かされているいのちに目を向け、その意義に自身が気づくことである。これは、誕生や死の瞬間のみに焦点を当てる教育ではなく、生き様についての教育、あるいは生きる意味についての教育とも言える。

また、死についての道元の捉え方「生死はすなはち仏の御いのちなり」（『正法眼蔵』）からは、死の可能性を間近に感じながら生の貴重さに思い馳せることの意義を知ることができる。

以上、道元の伝えたかった正伝の仏法を手がかりとして、あらゆるものの仏性を自覚することによっておのずから湧きあがってくる生き方、他者に対しても世界に対しても誠意を尽くす至誠の生き様について考えた。なお、最後に「十牛図」を示して、今回の内容との関わりを試考した。

（本学 社会福祉学部 准教授）

近代日本の“いのち”と“死”

金山 泰志

「生死」は歴史学において重要なテーマである。特に「死」は人間の永遠のテーマであるといってもよい。それは、戦争の時代と呼ばれ、「死」が今よりも身近にあった近代日本においても同様である。私は「いのち」や「死」に関する研究を専門にしているわけではないので、関連する主要な研究を紹介する形でお話させていただいた。優れた日本史研究の成果を広く社会に紹介することも、歴史学研究者の重要な務めの一つと考える。

まず、「死」に直結する病気について取り上げた。その病気とは「コレラ」と「結核」である。これらの病は、コレラが衛生システムの整備を促し「衛生の母」と称されたように、近代日本における医療の進歩の側面として紹介されることも多い。一方、コレラ対策の切り札であった「避病院」が「死」を待つための施設であり、結核も抗生物質が開発される太平洋戦争後に至るまで死因の上位を占め続けたように、当該

期の病の歴史を知ることは、近代日本の「死」を語る上で大変重要であった。

次に、近代日本の「死」を語る上で重要なもう一つの視点、戦争による「死」を取り上げた。ここでは特に吉田裕著『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、2017年）の内容をふまえた課題を考えた。当該期の日本軍将兵の死は、戦病死や餓死、海没死や特攻死、自殺や処置など、実にさまざまな形での無残な死の集積であった。重要なのは、その事実の確認にとどまらず、その死の歴史的背景を考察することにあつた（例えば、日本陸海軍の異質な軍事思想や日本資本主義の後進性など）。さまざまな史料（部隊史や当事者の回顧録など）を紹介することで、戦争中の「生死」の実態に迫った。当時の史料が自然と語りかけてくるような話ができれば幸いである。

（本学 文学部人文学科 専任講師）

真宗の教えを聞いたものが活動する理由

田中 智教

昨年には、「同朋大学仏教文化研究所 2018年度後期史料展示」で東別院の蔵書である点字図書を取り上げていただき共同事業として関わりました。

安藤弥所長、佐賀枝夏文先生（大谷大学名誉教授）に点字図書の歩みを顕彰いただき、点字図書を通して東別院会館（旧・東別院青少年会館）にて取り組まれてきた社会活動、またそこに関わる先輩たちの態度を窺い知ることができました。

さて、今回のテーマは何かもっともらしいようで、本当は「活動するからこそ真宗の教えを聞く」と言いたいのです。言い換えれば「関わる他者とイキイキと人生を生きていこうと思う者が、本当の人間らしさとは何かを聞く」と。「活動する」とは、一般的に言うボランティアをやるということだけではなく、「一日一日を生活すること」とも言えるでしょう。

また、「真宗」とは「真実」性、つまり人間が生きていく上での真実（本当の人間らしさ）とは何か、むしろ私たち人間が真実を持ち合わせているのか。このような問いに答えてくれるのも真実の教え

なのだと思います。

それで、教えが先か、活動が先かということになるのですが、やはり真実の教えが私たちの人生に先立って存在するということが大きなことでして、その教えを私が求めるかどうかが問題なのです。自分の人生が行き詰まるから教えを聞くのですが、自分の人生が行き詰まらない人もいるでしょうね（笑）。

ですから、当事者の苦悩や悲しみを聴く、また触れることによって他者の人生を学び、自分も含めた人間共通の救いとは何か、だれも排除しない“世界”とは何か。このような問題意識を持つことで、「真実」を求める方向性が与えられる。このことが社会活動に取り組む意義とも言えると思うのです。

2018年に東別院会館は50周年を迎え記念誌を発行しました。発行するためにお話を窺った「活動するからこそ真宗の教えを聞く」先輩方はみな謙虚で、ご提供いただいた写真にあるお顔はみなイキイキと輝いていました。

（真宗大谷派名古屋別院 職員）

仏弟子たちの仏教

福田 琢

「ブッダとは何か」という問いは単純なようで複雑である。もとよりブッダ (buddha) とは「めざました(人)」という意味の形容詞(過去分詞)、あるいはそこから派生した名詞であり、特定の人物を指す固有名詞ではなかった。今から二五〇〇年前のガンジス河中流域で活躍した仏教の開祖(釈尊)はもちろん、その高弟たちも、同時代の異教徒たちからはブッダ(たち)と呼ばれていた。やがて釈尊以前の過去のブッダたちや、いまだ現れざる未来のブッダ(弥勒)のことが語られるようになり、さらに大乘仏教の時代に入ると、西方極楽浄土に在す永遠のブッダ(阿弥陀)が登場する。今日では、釈尊も阿弥陀も大日も等しく「ブッダ」と呼ばれている。八〇歳の寿命を全うした歴史上の人物が、ブッダという概念を経由して無量寿如来や毘盧舎那如来の世界につながり、有限のいのちをもつ求道者が無限のいのちをもつ救済者へと変容して、大乘仏教のブッダ観は完成した。

度の学部の講義で並川孝儀『ブッダたちの仏教』(ちくま新書、二〇一七年)をテキストに取り上げ、学生たちとともに「ブッダとは何か」を考えてみた。そのとき改めて痛感したのは、「仏説」は決してたったひとりの開祖ブッダの声に還元され得ないという、ある意味では当たり前の事実であった。現存最古の仏典でさえ、歴史上の人物である釈尊その人の肉声ではない。それは数世代にわたる弟子たちの口伝の後に書写されたものであり、弟子たちの教説や編集や解釈を多種多様に含んでいる。並川氏の書名をもじっていえば、仏教とは最初から「仏弟子たちの仏教」だったのであり、原初の経典は、いわば複数のいのちが響きあって生まれたポリフォニックな言説であった。このような流れを踏まえれば、その発展型である後の大乘仏典が、諸仏・諸菩薩による様々な教説という形態をとったことも、ひとつの必然として諒解できる。

このような問題を改めて問い訊ねたく、昨年

(本学 文学部仏教学科 教授)

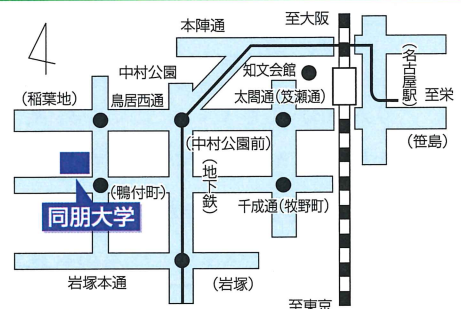
所 員

- センター主幹：安藤 弥 (文学部 教授)
所 員：森村森鳳(張偉) (文学部 教授)
所 員：石牧 良浩 (社会福祉学部 准教授)
所 員：岩瀬真寿美 (社会福祉学部 准教授)
所 員：市野 智行 (文学部 専任講師)

お問い合わせ先

同朋大学 “いのちの教育” センター
〒453-8540 名古屋市南村区稲葉地町7-1
☎ 052-411-1373

同朋大学 周辺地図



交通 市バス/栄又は笹島より①系統稲西車庫行、鴨付町下車
地下鉄/中村公園より③系統稲西車庫行、鴨付町下車